

常山紀談

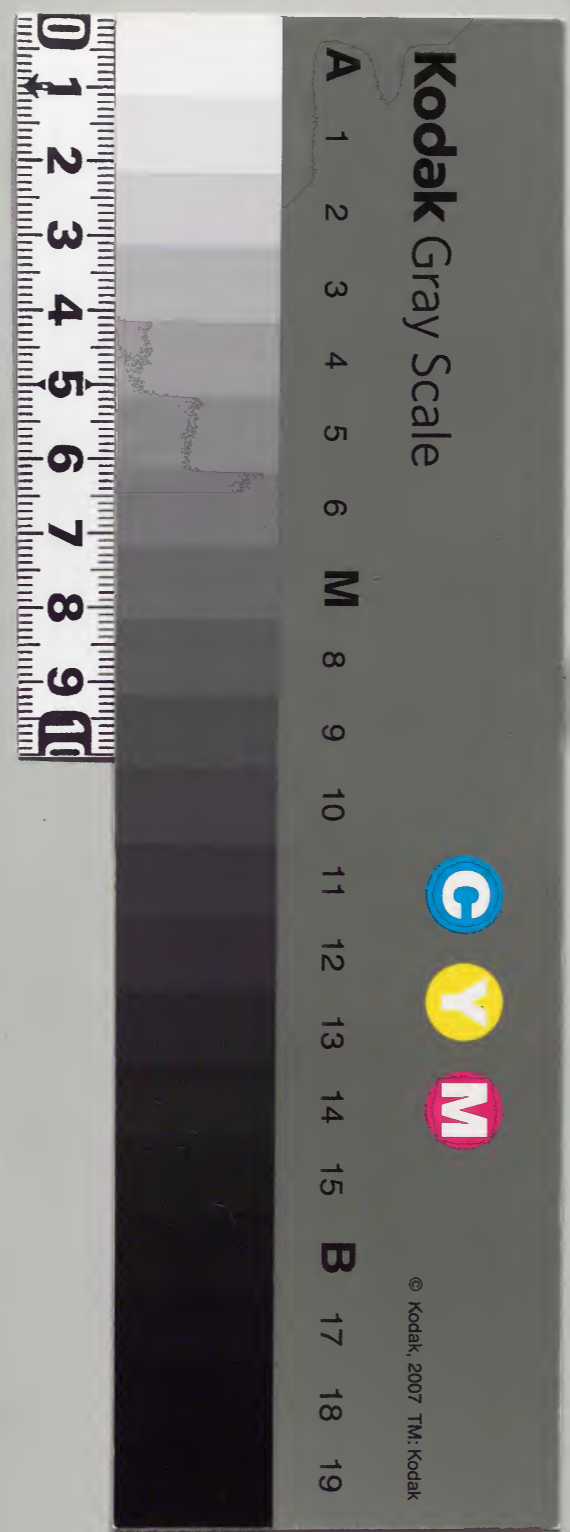
二十一

和書門			
四	三	二	一
二	三	九	〇
一	七	二	七
類	號	函	架

內閣文庫		
和	〇	一
書	三	七
類	〇	冊
架	八	函

第

內閣文庫		
番號	和	42301
冊數	17	(8)
函號	170	49



備前藩湯淺先生編輯

五帙

常山紀談

書肆

千鍾房
宋榮堂製本

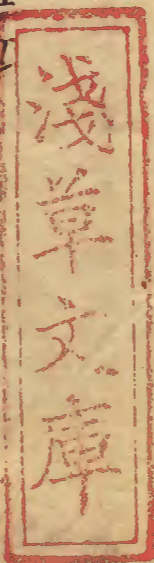
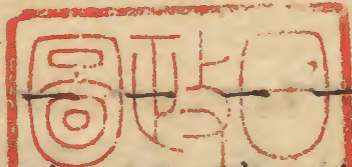
淺草文庫

常山紀談卷之二十一目次

- 一 大坂少々 台徳院殿諸將の攻口御巡見の事
- 一 東照宮志貴野御巡見の事
- 一 小田切所左衛門平野弥次右衛門武者振の事
- 一 真田丸を攻めし時の事
- 一 塙園右衛門阿波の陣へ夜討の事
- 一 本村畑田屋牧野四士武功の事
- 一 木村重成感状を辞せし説
- 一 稲田九郎兵衛武功を誇らざりし事
- 一 細川三齋夜討評論の事
- 一 大坂城中軍評定の事

目次

目次



堀直寄見切の事

山本権兵衛功名の事

毛利孫左衛門野村越中を詰る事

井伊木村桃戦重成討死井伊家諸士功名の事 并横田甚右衛門

藤堂高虎を激する事

脇五右衛門某氏三弥武功の事

増田糸右衛門討死の事

青木長屋生捕る事 并井伊家赤備の来由

藤堂家金戦渡邊勘吉功名の事 并渡邊始末の事

横田佐久間井伊家の陣へ御使ふ事

片桐丹後守一番首を取る事

常山紀談卷之二十一

備前國 湯淺新兵衛元復輯録

○大坂あて 台徳院殿諸將の攻口を御お巡りあり有馬豊氏

が陣所より井楼より上りせらる時御馬駿を城中より火矢

大銃を打つる井楼を下させるとやせどもおぬ体よてやうま

さるよ水野日向守多りく物見と巡見と八兵衛子細の陣々

悉く御覧あはせりまはる所よのさうやうなれば志

貴野を御巡り然るべしとやせバ則井楼をかりせらるり

○大坂あて 東照宮志貴野を御お巡りあり上杉の攻口より

らせらる時鉄炮をうち立てるが一同に城を向ておうけり大將

巡見の時此故実ありとてり景勝攻口の陣所道筋より砂を盛り

水を洒ぎたゞびやくに掃除して景勝直江只一人拵具して平伏
して御目見やうらなまじ 東照宮いよいよ骨折
御詞をかけしうらなまじは童終りさうひまで骨折り半もさる音答へ
やされたることぞ

○真田が丸を攻る時小田切所左衛門

一説よまかき傍といふ後毎伊豆といひ又道仁といふ武者執行
して名高し長久之を以て並をさのめりたりあり松川の軍よ
も武功あり加賀利常は仕へて大坂の軍も従へり

城きりよ近くまじるが鉄炮よりさうり其玉をさうりや一脇よ
並ひし平野弥次右衛門は足せくお笑ひ物誇す体平生のどと
し又玉一額よ中を取出しきと血流るる小曹ハ大事の務よ

此曹ハ信玄公の許し有しうらとりひく少しもひもみしことあり
アしきまり平野も小田切と相あしびき武者ふりを敵味方とも
は譽あへり平野が従者五右衛門といふ老矢面つら鉄炮頻にお
かけしうらばかすり手十八まで負し大剛のふりまひを城はよを
高声よ称美して姓名を兼らんとし平野別五右衛門は吾氏を
譲らあへりうら五右衛門大音けげく平野弥次右衛門が下人五右衛門
といふ者は是まで付し褒美は只今氏を譲らまて平野五右衛門
と申さるりと名乗らるることぞ

○十二月四日雪深く真田が丸へ加賀の陣も井伊直孝も攻まらる
事軍令を背きしれバ如何をべきこと 台徳院殿仰有し六先
伺奉り御へんとして本多正信 東照宮の御陣よありけ

東照宮いよ今朝ハ將軍おも悦びよるべきに掃部頭堀原
へ押詰め敵の威を示して味方を勇め立てしよと仰有るハ急
まかへりてかくも頻て御本陣に御出あり其道筋掃部頭堀原を
打るにせむへ直孝出向ひしよと申すに通らせむひぬ孕石備
前よかくと告まハ孕石もあへど其ごとく物も得ざる大將と
此方よりまきつとみよるに次が然るべしと程ありかへせ
ぬ時直孝出向ひしよと今朝の軍勢を御河みし打るにせむ
を孕石すて合点もさしよん其苦のりたりといひたり
とめ陣を移しかへり時井伊家鉄炮をうとせし事ありし時
本多正信やせし事と相問ト一事を二事と云傳へしよと
るべし

○大坂冬の陣に塙右衛門重之阿波蜂須賀の陣所は夜討せし
とあり

固右衛門ハ遠江横須賀の人なり加藤嘉明小室公一と祿
千石足輕を預りし関ヶ原の時嘉明塙は下知ししとて
きまきことしれは塙は諸將をれ陣を惣て
ひえ居し君命といへども敵は後をせんり口惜く思ひ
種ヶ島の鉄炮をまき散る打立し歸りし嘉明は
勇の有りて進退の理を弁へば大將と成り士卒をよする
事ハとひよよバ汝をきしハ我道なりといしれは
塙敵弱きバ詮方なく無理なる咎を蒙りんとて夫より怨
をあらし伊豫を出奔しし時其家の中は遂不留り

南野水高飛天地一閑鷗とよ二句を大文字小まきとり嘉
明怒とく塙が行先の奉公をかきとれりバ塙所々々々落おれ
後ハ京の妙心寺大竜和尚の許に居て僧とあり名を鉄牛
とよけさせ上よ刀を抜き鉢を招く人或ハみみ或ハ顔
たるが遂よ秀頼ふちのれり

年十六才已上五十已下の士八十人をまきつりゆり従者各一人と
定めり塙と所宿越前と門口は鎗を入りて一人づつあつた
ゆりるが鎗をえりて従者をよびささぐりて塙怒りて刀を
せよ何給と事やある首あえそ敵の旗を始とて武器を奪
ひとまじと下知とどつと押寄り蜂須賀至鎮の士大将中村右
近白小袖を忌曹をりて馳合せまを木村喜右馬突伏し

稲田修理透間たぐり走り来り木村と突合寄り馳集り防ぎ戦ふ
采田監物ハ池田左衛門督の陣所を押へ居りがこれもかけ来り
おめいり攻入りても寄手おひりかけ集りて引返り
生駒又右馬首とりて大野主馬許に持せやり前進んで中村
が倒まらるを見て首をとりんとす不を修理が子九郎兵衛十五才
ちりしが生駒を討取り

此夜討のそ蜂須賀比士大将樋口内藏助今夜を討入り
り若士ともいりて見定めりやとけりやとよ中村右近
ゆちをよきと振返んとて内藏助をかきよ呼入何とて夜討
有べきやと問ふ内藏助さまばとて城の櫓はらば焼落
る本町口の櫓をり焼るハ夜討とてき為なり今日挟間よ

ア外をのぞき見ゆる体見ゆる由急夜付入聲りと答ふ皆さあ
らんといふ隣の陣小屋稲田修理と餅をふるまらんといひき
修理其も来る道はまらなれば七八十間もあるべきふとく
来しとてとてバ修理間の志きうの板あふあふとてとて
おきぬそれをとて来りといふと答ふ果して其夜半夜付
入り右近真先よち修理おつとてとて右近ハ曹をり
きとて後者物具を持来りて着せしとてとて右近刀を
ふりて敵の鎗を切拂ふ修理大音あびく右近とてふい
とてとて右近ハ鎗七八本とて突伏しとてとて後もあり右近が
子若狭ハ阿波の留守よちとてとてとて小其膏よ右近修理よ
向ひて若狭此度戦場ふとてとて事を口惜くおひ度くる

べき昔のいひおとせしを軍法を破る罪をおとせし呼よせしとて
修理充よとてあれいひやりとてとて来らまると告べしといふ
そとてとて若狭ハ陣屋近きあつりよ来りてかき居し
バよび入て其夜もふとて右近父ハ次郎左衛門とて信長の
扈從阿波守よつけらまて禄千石士七十人添られとてとて
塙ハつて支度して夜討の大將塙園右衛門とてとて木れを
道よとてとてとて和平の後今福口の南よ長二尺あまりの木
塙園右衛門とてとて建しとてとてを人々あやとて問は塙加藤嘉明
我をよとてとて知して誅せんといふとてとて討を待と
のへ塙が好ある面とてとて紙来りつとて水野勝成の士黒川
三郎右衛門尋来りつとてとて昔の交りをおひひりて来らま

こそ悦びあるは林半右衛門八日比親も浮りきいふして一度
の音づきもせぬやわづらきとひひくれは黒川守て林ハ池田の
家奉公して今天満橋の陣所有かくと尋てんとして帰し
林はあつていハバ林さまとて我塙と相約せハたて大國を
領もももづら鎗を提おりの小軍せどハ男子よあじと
いひつ小塙夜討せし時橋の上は持机は腰りけ馬ぎり
麾を取らうとて年四十八老うといふべきあはむ相約
せし刻小きづひもバ使をも遣さざりきとて黒川又塙が方
けかくと尋てんは塙林がいふとて理あるとされども我嘉明は
士卒を下知せんともひひもよと罵らまうと申口惜く一度
麾をとる軍を下知しく嘉明はあはむとて其夜も

手づら鎗を横へ突てかり度おひひもさハをけりた
既よ志を遂これハ重ゆて軍のあん時ハ鎗刀の折るちと戦
せんといひとてや

○塙が夜討の時木村喜左衛門畑角大夫田屋右馬助牧野湖太
四人鎗を合せし小田屋ハ薙刀なり田屋をバ鎗といふべし
どといひし小御宿越前守て鎗も薙刀も柄ハ握の本まで及も
同づらもの形れ少しきとひひもさハ同づらもの形れも薙
刀ハ短きまバ敵は近き手鎗より一歩近し鎗といふは何の
子細の有べきと秀頼は申て四人とも鎗を合せし感状を
與へらまうとて

○大野主馬が組の士此夜討は功名有木村長門守を頼て感状を

賜はん事を申され木村関く上り申すもよく聞し召されば感状は
おいてハ定めて下り賜るべし但し感状を拜領して誰不披
露せしむらんや一本鎧の士あるバ又他國の主君はな公せん時
の眉目よまじべし大野兄弟ハ大坂の長長は身君と存込を
共におぼさる人の何れきあめ感状ぞやといひしは主馬恥く
詞あがりて

○東照宮後稲田は御感状を賜ふ太平の後御旗本の人の稲
田小波とて大坂夜討の時此事記し置りしとていひし小九郎を掃
討して十五の年北事隔りてこれ忘し置りしとて強て問ども
一言もいひ置 公方より細りし感状の詞をとくも存寄
せし書を尋く深くをよめ並再びりし事たればこれも

忘し置りしとて語らざりしとてあり

○細川三齋病を患ひて吉田は寓居せしれく時渡邊睦菴
訪ておがしりす時大坂にて搦夜討せし時蜂須賀の
士小感状を賜りしハめりあるゆゑや夜討ハ虚を見て討つ
事古今同し虚有て討まは賞有しハいづりしとていひし
三齋は又事ある小遠く慮らせむひく諸將の軍兵を
まゝめたりしとていひし故あるべきもやといひし

○大坂和平破る後秀頼軍評定の時第一は長曾我部次
真田其次は毛利豊前守列坐せり秀頼大野修理を以て今
度の合戦各所存を問はたり真田先長曾我部はヤサシとて
辞し申すは長曾我部は真田後長曾我部は國は中野

つばき人有りしむりてまじらばすれはくと答へたり真田さしづバ
申て刃人去年の軍ハ城固く兵糧も又多かりき日数を過バ必西
國の内よんをよする人もあはべき多寄るの中は心替もあべしと
何れも存せしむ如しおひの外は和平は及で惣堀はうめられぬ
今度ハ守りて遂べきは有べしと存せり只打出く軍さる程を
らバ君師如馬ひひて伏見の城を攻落し即御上洛して洛外を
ハ燒せしむ守治勢田の橋を引落し所々の要害をかき守り
まら洛中の政を御沙汰みせし其後勢ひよりて合戦の謀
ひべし祝ハ申納めぬ若御運尽きせしむりしはも御上洛あて
一度天下の主と號しなり洛中の御政務を執行すも人よおい
てハ後代の名は是よハるんまどとりひし小長曾我部を始として

これ然るべし同心しりる修理秀頼公の御旗を出されんり
からくしきよ似たりと肯ぬ名を足と修理が母を人質よせ
置ぬいりある所存やと人々疑ひし議決せしむりやみりか
亦は修理が母の人質よせし返り賜りぬすて小長曾我部の
人数伏見よとせしとせしるバ秀頼又諸大將を集めて再び軍
の評定よ及びく小長曾我部まら最前のごとく真田ふあつ
これバ真田駿河大御所の軍どて常よとやうりと兼りり
少しも違ひぬええんや否ハ昨今伏見へは係して軍兵の疲
をも休めぬや茶臼山よおしきとや沙汰ハをやりぬるも
いざや伏見より大和路をわきバ行程十三里あり跡疲まらべし
明夜ハ軍兵いりよ存るとも曹を枕として一宿ありせぬるやい

一夜討はるべき圖カ中アタアと存レ左衛門ノ佐藤ノ向て一挙ニ勝負ヲを決メむべしとヤクバ後藤又兵衛ゴトウいづれも此謀ハ然ルべし存候ニされども真田をめて夜討の大將とせんは萬ハひくも討死スらん時人々力を失フひゆるん今度國々の諸浪人馳集シ幸偏ニ真田一人を目あてよ仕レ夜討をバかくすは又兵衛ハ向ルらんといへば真田とかくはれ孫ノ向ルといふは後藤ハ有毎ニ後日の合戦カ大事ニあまは真田及出ルとせよられよと争論シて終ニ決メせてやみくもせり

○大坂夏の軍は水野日向守勝成カネナリ大和口先陣の大將を令メせり堀丹後守直寄ホリ松倉豊後守重政ナホヨリ大和口ヤマト向ル五月五日夜ふけく勝成敵よせ来ると見え松明サイメイ多く見ゆる懈オコタむべしとせり

を諸將シヨウシヤウ小のひきりす丹後守は日向守ハ物モノよたましとせり功者コウシャもおもひまはる故何ぞ松明サイメイを多くせりや敵はあはれとせり日向守又使ツカヒを以テて松明を消クし敵ははらばらと告知ツケシラせれば丹後守は敵なく何ぞとせり火をとりつとせり功者ありく消クせしとせり果ハタして後夜又とせり

○松倉豊後守重政後藤又兵衛が陣を切崩キリクダし松倉が士山本ヤマモト兵衛義安十八歳まで鎧ヤリを合アせ首カビをととりつとせり敵は討死せんと云ヒて敵の中へ入リ鎧ヤリを取トリ其鎧ヤリも又敵を突伏ツキフせ首カビを奪カり

○大坂冬の軍小池田左衛門督の使番毛利孫左衛門先陣より
村山越中毛利に向ひ我今朝より敵近く居てつらき事なり指物を
なぐ鉄炮より破られぬとらふ毛利我五百人の士此中より撰で
あつを許されしを汝は誰とせんや汝竹把此外は知れど是も
指物の先はさげしは其語ありと云ふ村山答ふ詞あり

○菴原助右衛門井伊家の士大将ゆく軍奉初あり大坂夏の軍
小月より道明寺に向く先陣より井伊家の士大将川手主
水成次ハ去年の冬より直孝をうしむるを討死せんと云ひ
定めしより出くさるる日父子最後の盃しりしや金の鷹足
指物より真先よかけゆる山口伊豆守重信

山口修理亮重政嫡子伊豆守重信二男長次郎弘澄ハ御勘氣
をとり奮居の身あがり井伊が陣をかり忍びて出たり
遠山甚次郎騷坂弥五郎満座七郎右衛門もおとしとさたけけ
一説に内藤新十郎佐久間藏人山口左馬次二百廿面もふ
ぞ切り井伊が先陣を押崩し此時井伊家の剛れを
る鎧を合はる士ありとり山口伊豆守ハ川崎和泉を
討取より木村重成ハ田の中あり小高きみひえて下り
るを山口目やうけ畔をつらひより治の有るふり入て
畑の上あり重成と鎧を合せ山口爰まで討死しるとり
木村長門守重成が一陣鎧の鉾を拵へ待たせれば川手を
突伏し菴原ハ提の上よりおちて居るが川より傍り時腰

おけりしる金の磨れひめくを見つと立あがりかろりへと下知
まる祠の下より八田金十郎走り出ま先うけし味方の斬伏られ
し屍をみ越え大音あげ一番鎧と名乗鎧を入るを敵三千
人作り取まふといくと面もあつたさあひる
うろたへて廿一ヶ所甲曹を突さるま既し付死をまきよ戸塚
左大夫を始として曹のまろをわらひけ黒くしりを踏とて
井伊が軍兵一回まると押かり木村が陣を切崩れ菴原八十文字
の鎧をよここ進んで木村を目みりけ立向へり木村菴原を
二鎧まで突つりし菴原後のまをそと振り珠数をまき
しるが念佛をとるく野猪れあれまがめく木村が鎧のしに
まり入り突伏し安藤長三郎かけ来ま其首給まらんや

とつ菴原ゆて大坂落城日あり敵の大將れ首とる幸易
らどあもぞとつ安藤木村が首をえ菴原あらうけ
武者を討取く其ま母衣結添くま軍法なり
大御所の実弦よまらん母衣結よつれしと母衣結を
安藤まへへつ菴原が後者母衣のゆしとる白熊金乃
ゆら竹ハ菴原が許よとあかり

一説し陣野馬盗ありしとあつて警し安藤長三郎
不敵者あて用心もせぬ馬を盗れ翌日の軍よ井伊家軍
兵木村と戦ひし時おれし敵敗れよ及びく長三郎
付しるを助右見くあれし腰かけしハ能敵なり討を
とつハ長三郎動くべし死人のめく者討く功名あり

六ノ土

らばと答ふ菴原をぬれば長三郎あもさうり朝をかたれども
只首とれとのいひく立あぐらと長三郎則突伏て首を乞
是木村重成あり長三郎を責して五百石あへらる此軍小
千石の賞をたうえらる者ありれば長三郎憤りて立去り
將の首を取らざるも其法をたうざるを賞せりと直孝
泣られしとうや長三郎ハ安藤帶刀の後子之又後井伊の家
よゆら仕へく千石の禄をたうへられり

川手満座山口ハ軍の場は死一遠山ハ敵の首を取ら菴原を見
るとて立ちあぐら死を鷺坂ハ小溝の中は倒れしが口の中は暖
ありく百姓の家をかき入きりしが息出さきすうりぬこれ
敵よあぐら早うりしども軍奉新の菴原が下知あらぬ前

ゆきよぬけがけと一八田を一掃陰よ定めしき 東照宮

御感状を賜りしなり

金十郎ハ一番鎗を合さるのとなげ山ノ口左馬今山ノ口
頭飯塚太郎左衛門二人をも討取らうとつり御感状は黄
金御馬を添く下さるともつり

木村が首を御前よ知れよ髪よたさるの奇南香の薫せらば
御感あり木村が曾ハ四方向くく鎌形の立物打つり

安藤を伏見よ召青江の御脇を結らる又一説ハ
殿長三郎は黄金二十枚時服三つ賜らるとつり

菴原が子の主税助少敵を追うけく組討しる助右進とせ
よりくいふ主税ころろ志がう小せよ爰あて見物とらるとつり

主税是より力を得脇差を抜く刺通しよりし如く從者より小栗
と遂にせしむるを横地修理西郷伊豫ををんく 東照宮
よ主税が幼年の武功を稱しやかり後よ人々子の敵よんく
ふ援けざりし如何も同くふ菴原せられも子ハかきもき
よてんとのと答へたり

直孝木村と軍さし時中よ堤あり又藤堂高虎も同く
敵よ向ふ如く久貝因幡守高安筑後使をりて敵と味方の
中よ境のふ是をさす味方勝すべしと御旗本を進め
しとて 東照宮怒りせりいこもたの事思慮を
くく我先陣の大將つとてまきや敵堤をさすバすて敵
あへんくも勝べし高虎もええぬめの哉と仰り

小栗又市を来り直孝只今敵ふかり堤のふよ此堤をと
らバ勝んといさみんとり 東照宮さぞあへん必定獲あり
と仰らまきり又矢尾少く孫堂が先陣敵よ向ふ渡を勘
え傍敵とせり合し時高虎馬を御旗本よ衆来り御旗を
あへらまきりし中もあへぬ横田甚右馬の上より大音あげ
御旗をあられよとやハ何者ぞあま退ちしと罵り
らまきハ高虎ををよめ是も激励の術あるべし
東照宮白山入菴を召て関東の武者ども軍よあれて物
い詞のかりしと仰有しバ入菴只今の一言横田あり
て六と感トヤクリ一説よ 東照宮の御旗本へ孫堂高虎
衆来りて敵の大軍押出しとて横田甚右をのりあへ

ど何の御下知を待たせしやあるとく切崩して討取りと云
東照宮無礼ありと怒らせぬ高虎はよく見切て味方は
手負討死あまやうとて仰らるるを甚右衛門大音
けげく敵を殺せし味方は手負死人あはれ半やあるや
切崩せしゆへと罵る 東照宮横田推参ありと以の外は
怒らせぬ高虎は我陣は棄てし和泉ハハをぬくと仰の候
横田を御側近く召まされば人といふも汗を握る
そのは横田が耳は御口を穿らまさせしやうせむひてくり其
後いふ仰るるごとと横田は同人ありし和泉を汝再三罵
りしハ一段然るべけれし一戦をとげよとハ遠き御慮有
て仰られし事とてありしや

○五月六日井伊家の士脇五右衛門今日の合戦ハ汝より段々ふり
詰来まバ大く此事あてハ功名遂げし若き人ハ力のうたり
とてしらすきりといふ如く直孝の近習此士三弥といふ若年の士
首ニツとりて脇を見まされハ脇もまろニツとりて翌七日三弥又
名のゆゑも人あつたりし事あて三弥何事も老功の人とて
崇めし身も恭なる体にあつたりし事とて大坂此軍の事
替りし事もゆりし老功とて崇めぬハ何の故ぞやといふと脇
聞て此度汝の功名れごとくある事度う侍ありし者ぞといふハ
三弥さてハ子細もあし吾功名のこたはいと易き事ありと
いひしとぞ

の士受取て城中の庫入を其價ハ禄の内より取り
此故ハ井伊家の武備がごとくあり若去て他國より士
あれハ奉行の士武具をぬりあつたりあり井伊家の
軍令とて赤いられ武具の事志せりも今世傳はり
ちり

○藤堂高虎の士大将渡邊勘兵衛了ハ

了ハ若き時阿閉淡路守ハ奉公一十七歳の時一日は首
六つ取り阿閉の家より剛の者といひ士十幅一丈ハ
鶴の丸を給ふまじり母衣をかゝる者六七人あり了ハ此
母衣を許さざり後中村一氏をよせり小田原の小條を
攻らむ時山中の城を俄に攻落すべき松を見て一氏を進めて

頃て打破成合平左衛門一氏の馬志しを本丸のすゑ矢倉
よち立させ中村式部輔一番守と呼はり了ハ秀吉錦の
羽織を一氏より取り我々の功名ハ汝ありとて
お威を了らあへられ固く辞しられ羽織の片袖をあ
せんといわれをさすも辞しられ蓮生院廉もとつ
馬を了らしたへら其後増田長盛をよせり関ヶ原ハ
時ハ大和の郡山北城有雲の軍破り郡山の城を受
るんと筒井伊賀守打向ふ城代格よ米塩屋徳順了
とたふ城をさす了ハ三の郭を持口と大將たれハ盗
賊商家入る女をたすり了ハ五百計の兵を打連
うち巡り盗を切殺し追ちり或夜盗賊城外の町家

火をかきんとせしをケル^{ケル}あまき^{ケル}討たれ^{ケル}盗^盗
来らば敵^敵なり^{なり}と^と言^言ふ^ふは^は城^城外^外の^の商^商家^家を^を焼^焼拂^拂い^い
し^しり^りあ^あり^り自^自焼^焼ハ^ハ時^時あり^{あり}も^もや^やま^まり^りて^て焼^焼バ^バ商^商賈^賈強^強き^きて^てう^う
つ^つん^んも^も不^不便^便あり^{あり}と^とて^て止^止ま^まり^り城^城兵^兵雜^雜人^人を^を合^合せ^せて^て三^三千^千餘^餘
なり^{なり}し^し兵^兵士^士三^三十^十人^人下^下於^於八^八百^百計^計か^かけ^けて^てあ^あり^りも^も了^了り^りは^は徒^徒ひ^ひ
者^者ハ^ハ一^一人^人も^も逃^逃知^知ら^らず^ず又^又城^城中^中の^の士^士百^百餘^餘人^人金^金銀^銀を^をあ^あら^らせ^せハ^ハ出^出
奔^奔せん^んと^とい^いり^り大^大に^に怒^怒り^りて^て城^城中^中の^の藏^藏子^子有^有金^金銀^銀ハ^ハ皆^皆殿^殿の^の物^物
なり^{なり}殿^殿の^の仰^仰あ^あり^りて^てい^いそ^そう^うか^かま^まさ^さき^き且^且此^此城^城を^を墓^墓所^所と^と思^思ひ^ひ
定^定め^めて^て身^身の^の重^重宝^宝何^何も^もな^なら^らず^ず出^出奔^奔せん^んと^との^の用^用意^意あ^あら^らん^ん
錢^錢一^一文^文も^もこ^こら^らず^ずべ^べく^くは^はか^から^らず^ず者^者小^小兵^兵糧^糧采^采を^を費^費さん^んと^とり^り
出^出奔^奔せん^んと^と罵^罵り^りて^て三^三の^の郭^郭より^{より}妻^妻子^子を^を本^本丸^丸へ^へ入^入ら^らせ^せバ^バ横^横走^走

儀^儀右^右兵^兵衛^衛も^もつ^つづ^づいて^{いて}あ^あら^らし^し藤^藤堂^堂高^高虎^虎本^本多^多正^正純^純那^那守^守
あ^あり^りて^て此^此時^時長^長盛^盛ハ^ハ高^高野^野を^を殺^殺され^れ一^一あ^あり^りし^し大^大坂^坂
より^{より}も^もせ^せま^まり^り士^士卒^卒を^を合^合せ^せて^て九^九千^千餘^餘人^人あ^あり^りし^し下^下知^知て^て
持^持口^口を^を配^配り^り日^日夜^夜お^お巡^巡り^りて^て急^急を^を戒^戒む^むル^ル將^將あ^あり^りて^てき^きて^て龜^龜
ま^まの^のハ^ハ各^各相^相疑^疑ひ^ひて^てあ^あら^らし^し成^成る^るに^にあ^あら^らず^ず了^了り^り下^下知^知
より^{より}も^もつ^つづ^づいて^{いて}城^城は^は將^將あ^あら^らず^ず長^長盛^盛高^高田^田遠^遠江^江山^山川^川半^半
兵^兵衛^衛は^はま^まり^りを^を持^持て^て城^城は^は庫^庫の^の物^物を^を保^保つ^つ目^目録^録を^をあ^あら^らし^し藤^藤
堂^堂本^本多^多は^は後^後に^にあ^あら^らし^し命^命を^をあ^あら^らし^しバ^バあ^あら^らし^し大^大に^に擲^擲の^の
門^門の^の鑰^鑰を^を高^高田^田あ^あら^らし^し士^士は^はあ^あら^らし^しか^かれ^れバ^バ奉^奉行^行を^をあ^あら^らし^し門^門を^を
ら^らせ^せ本^本丸^丸を^をも^も入^入ん^んと^と強^強が^がり^りた^たれ^れバ^バ使^使を^をあ^あら^らし^し城^城中^中より^{より}
守^守ら^らず^ず門^門を^を寄^寄手^手より^{より}人^人を^を付^付け^けて^てあ^あら^らし^しハ^ハひ^ひび^びぎ^ぎり^りあ^あら^らし^し

といひせし下知してはありて門の鑰を奪ひ取りて
城をとりて外郭の柳町より奈良の方大安寺をばて
志づくに兵をとり出せし法令の厳正なりしよりて
一人も騒ぎありきとぞし跡は跡を以て鑰を取取り
時の実もれんよ向ひきたの志は毎礼に似てし武士
の義理と申すも若城中に庫の物一つも失ひる時ハ増田が士
ともハ盗をとりて出奔しと申されん口惜く計ひ
きといひされども答ふる人あるれハ鑰を了投出し取りて大
門を啓し殿して城を出大安寺少むりそれよりしれ人分
ま去り長盛なる所にて下知せし始終の有様を以て九
千の軍兵馬も凡八百匹もあらんよ下知しとて

悦び感状を了しとて
石子の長き條も三千石ありとて

新に奉公しられども世に譽高き老あるハ高虎電せし事
大方あり旧臣ども大に嫉恨あり大坂五月六日の軍了
ハ先陣の中れなるを六日の朝道明寺小軍を進めんやいと評
定し決せし矢尾平野ハ兵を下知し地利あり
見て来らんとて握り皮の羽織を以て麻毛ある馬に乗千塚より五
六町もうちわたり小朝此物見塚と右を以て進いしとて同ハ後藤
又兵衛とちりし軍を知りし水野日向とて鉄炮を打合
しといふ了圍て堀に士一人添て入りし旗を以てしと云
遣り頼て片山まきく乗行西の方を見れば八尾より若江まで大坂

の軍がしつたあつらうで東方の先陣は目をくけ馬の鼻を揃
へて進み来るを了さそそとさひ馬を引返して道明寺をさう
進む味方を押止る藤堂仁右衛門何故ぞと問了あれを見らま
ふ取わざる近き敵を打拵て道明寺よりやうやあつらひを
仁右衛門もたつらと同心し高虎何ぞと進む味方を押止るやと
母衣の者をりく下知せしるを了頓く高虎の前よりあつらくと
中せば高虎め何ぞと思慮のなきを了何のまどぞればよ
かり来る敵は辞退しるを了相がりやと打破るの外そあ
つらひは仁右衛門よと下知せしるを了此処泥まて足入
あり陣を備えき地あり敵あひひさし四十町りやいらん横堤ハ
是より十町計もあつらひ横堤を細かき道の道四筋足らぬ南

向ひつ味方を西向小押直し横堤まで進んでそこを陣を
へ二軍せん北二筋の道を南下知し南二筋の道を押し味方ハ
勘き下知して横堤少く押しめ列を正し南小一ツは合せてハ
せんハ必定味方の旗をさしと云く馬をさしハ四五町をり後
よつらさ多細道を乗れ藤堂仁右衛門兼名弥次兵衛をさか
つらハバより進む藤堂新七同玄蕃等一騎げけ馬をささか
我先西郡萱根をさし進みゆくを見てさうハ南の味方
をおし止ても何の用もなきとさかられんと云捨く了ハ山土
阿野村より向ひ高岸の士大将我とくと八尾道を西小地藏堂
をさかかけけハ了去年故有く高虎といふはさしりへと云
一事のさし今朝より殿の前少く勝敗の理已一人して討に

少くも渡邊ワタナベの武功ブコウを耳ミミも聞入キコエせり
あり長曾ナガソノ我ガ終ハシ盛親モリチカハ女尾メノビの塹ツツミ森モリありぬ小すむ朝アサを方カタのま
きまのり物色モノイロハけりあも南ミナミの方カタより緝地ツツミの白シロたれり
此コノ故コト付ツキし旗ハタさして敵テキかり来キまバ塹ツツミの上ウエ狭セバきバ旗ハタを後アトに
卑ヒキき所トコロへあらして立タツを敵テキハ北キタるといひく仁右衛門ニウエ先サキがけし
馬ウマと鎧ヤリを合アヒしてかけ後アトにバ業名ノナ乗ノリつきて一陣イチジンの下シタにせしれん
身ミは一騎イツキがけハひが事コトありといふ仁右衛門ニウエみり顧カハて渡邊ワタナベが已ナ一人
武ブ勇ユウ又マタあつらふ口クチ惜オソし小討死コウチシまでよといふく馬ウマを乗ノリたれし鎧ヤリ
を横ヨコへ大音ダイオンけりかたりしを盛親モリチカが兵ヘイ鎧ヤリの鉞ツノを拵ツクへ境サカイり
おろしきころ盛親モリチカ間遠マドホあふ一人も立タあがるべくくべと下知ゲチし
近チカくとたうらうら射イハ一回イチドク小立コタテ上ウりあつと声コエをうけ鎧ヤリをあへて

きつたてたれば仁右衛門ニウエそとあて討死ウチシしついでかたり藤堂トウドウ
が軍兵イクサと崩クツき曹サウの猪ブタを志シめたる士シ六十三騎ロクサンサウキ歩卒ホソツ三百サンヒャク餘ヨリ人
討ウチして一支イチサニもたなく敗北ハイボクしりハ山土ヤマツチしく向ムカふ敵テキを追崩オツクし
南ミナミを乃ノ先陣センジンやぶれて旗ハタを拵ツク我先マサキに逃ニガるる小横コヨコさゆふけ
向ムカひ盛親モリチカがみまを逃オウカせし仁右衛門ニウエが討ウチまし地チをあへて
しり盛親モリチカハ矢尾ヤヲ一町イツチヨウをりの西ニシ小橋コハシを後アトに居イりし
いし勇ユウ切キつかたりバやとハ思オモへども先サキに首取クビトリし老オシももれ
旗本ハタモトはれく了マが左右サマダ三十騎サンジウキ計ケイするべからず母衣ホロの士シ山岡ヤマオカ
兵部ヘイブ已ナ下ゲ七八騎シチハチキもせ来キたれば了マ頻ヒシて押寄オシヨリて盛親モリチカが陣ジン小切コキて
か山岡ヤマオカ兵部ヘイブの矢倉ヤクラ長藏チヤウサウ二人ハ南ミナミの方カタにかけしをまわりし
戦タケひくもさる討死ウチシを志シめたる兵少ヘイショウもバ少ショウし引退ヒキヒキて畑ハタ

の高くひきう地を便タリ小兵を集め盛親と互タカヒに間近く睨ニラ合ヒく
ひく居タカトラも高虎使をりて何ゆゑ引退さヒキリカクやと七度まで下知
せしつゝ引退も入カテキ此一陣中強敵を切崩しキリククの旗をさオレシふ押結られ
むニク敵を退タイリして大和ありと答ふ高虎使をりて今般
死すべき所を遁カま面目あメノボクく退ヒツカヘつぎやと引退せし下
知せしつゝ引退もあヒキづかへる廣に軍場してハ勝も負も
所シヨクして様サマふころ味の味方のめカカは軍の退をさスレイふ下知
せしつゝ引退もあヒキづかへる敵に切崩され多くの味方を
捨殺し旗をも棄ステて敗ヤれんを殿トハ忠と思オホシふ氣ココロはたづ
かく中渡邊ハ今朝より敵よコシテウくれば五分一又ハ三分一の軍兵
よイドて毎夜うち勝八尾カチヤラゆく味方をヨコアヒけ換合小敵を破ヤスる渡

邊タなくバ味方ハ泥ドロは追入られ一人も残らコず打ウちまムべ
浅間アサし味方れおのアリサ盛親モリナカとらハ兵ヒあハひく居
るを討ウちめメるバ殿トの弓ユミ箭ヤ恥ハなカるべニとク旗本ハタモトをさセる盛親
をさセるやハ討取ウチトリやさんとイ色イロハハたタりハやハ直考チカウ
軍カチは打ウち赤旗アカハタおハ立勇イサ進スんで押来オシキタりハ盛親モリナカが旗本
をめメるころをスル見ミる時トキをトよクまシてハ切キつクかり退ヒく
り久宝寺キウホジより城兵アシも足アをシて敗ヒキれルをオもシとと
鉄炮テツポウを打ウちけク追オはシれば盛親モリナカが旗本ハタモトも悉オトクくうち折オり
了ハ三百余人の首クビをとり平野ヒラノまで進スでハりハあハれバ道明寺
口クチより敗ヒキれテ城中シヨウより引キ入ル敵道セウダウをオもシて詮方セシカタあハくため
ひ居ヒらバ大オ悦ヨロび高虎タカトラの許モトに使ツカヒをオもシて敗軍ハイクンの敵スミ数万マンキの帰

路を立切て軍兵をさす賜りてバ疲ま呆氣たれし敵を
みらば打破り大坂の城をバ藤堂一手の武勇もて攻落し
疾軍勢をさす平野をかきしり敵を打破らん事掌の中
よありと云々まじも高虎更用ひば使をききて何とて引返さる
やと怒らるるのさなりしバ了も力なく平野に火をうけ軍を逃
多りこれと平野の煙もて城中より入る敵を妨ぐるの術あり此時
高虎兵をすのバ真田も毛利も城中より帰て入る事を得たり
と世のひりしとぞ直孝高虎の陣所へ行まりし高虎對面し
く先陣よおまじり老のりて同姓あてり物主あまき討死し口惜く
いと涙らまじれば直孝我敵も勝てしるを追は時むしらの指物さ
て軍兵を下知せし士大将のひりし小強敵を切るびけ軍兵を下知

ぞ有様あれ大剛の物めしあてり其人ハいふと問まりし高
虎物もいふ其時了曹を脱て進み出むしらの指物さし男
ハ此勘多氣あてり天の冥加もて今日の武功を井伊殿見届り
いと大音小やせば高虎いふいふ憎まれしあてり終小藤
堂の家を去り京都よむしも睡菴と号し寛永年中まであ
がへ居りしとあり

○大坂の軍五月六日井伊直孝打勝りしは 東照宮より
横田甚右衛門 台徳院殿よりハ佐久間將監を使し命せし
直孝が陣所より佐久間先よ歸りし直孝今日の軍よ打勝りて
川手主水をさすめとて討死多く明日の先陣めりしと
を 東照宮より召聞ぬ体よありしと横田歸りし

直孝大利を濟し明日も勝つて残る敵をあきらむべし討
取べしと勇まじりしや。東照宮さぞあつんと悦ばせ給ふ
時横田すゝみあつふ一つ思慮あつて直孝が軍兵過半は負
死人も多し。いふ心やゆりゆりも明日の先陣はくつ換らまは直
孝畏りしにばとも強て仰出されしと申せば。東照宮我も左思
ひつる事よとて加賀利常本多忠朝を先陣に命ぜりし事なり
陣中の使者ハ心得るべき事なりとて

○片桐丹後守ハ越前忠直は仕へが大坂復の陣に勦氣を盡し事
のありしに先陣は忍行くひて居しを本多伊豆守見て片桐
ハ必討死せしべしあれ救されしと申せば忠直片桐呼べしとて
使番須田長左衛門先陣に乘初めしと申せば片桐忠直の陣に

参り曹を脱涙を流し謹で居し忠直も耐汝が日比の恥ぢ
れぞと鞘をかけたる片桐今の時よりかりかゝる事なりと申
ふ色願まじ忠直の方をまつと刀を馬に寄せ打乗先陣に向く
軍始まると曹首を得し越前の一番首なり

白雲三墳

